

ユネスコ ESD 世界会合報告

ESD-J 事務局 野口扶弥子 / ESD 研究センター 阿部治

ESD の 10 年のこれまでを振り返り、これからのあり方について議論をする、中間年レビュー会合としての位置づけの「ユネスコ ESD 世界会合」が、3 月 31 日から 4 月 2 日まで、ドイツのボン市で開催（主催：ユネスコ、ドイツ連邦共和国、協力：ドイツユネスコ国内委員会）されました。ユネスコ関係者、各加盟国の大臣、政府関係者、大学、NGO を含む、150 カ国、900 名が参加したほか、50 カ国の環境や教育分野を中心とした大臣が参加しました。

会合は、下記の 4 つの主目的に沿って、実施されました。

- 1．あらゆる教育、質ある教育に、ESD の要素が不可欠であることを明らかにする
- 2．ESD に関する国際的な交流の促進
- 3．DESD 実施における実績評価を実施
- 4．後半にむけた戦略づくり

会合 3 日間で、ハイレベル会合、全体会、分科会、サイドイベント、事例実施地域を見学するプロジェクトベースの分科会、優良事例および加盟国の取り組みの展示が実施されました。

ジェンダー、気候変動が強調された全体会

全体会は、初日午前、2 日午前、2 日目午後、3 日目の午後の計 4 回実施されました。会合初日の午前中は、松浦氏（メッセージ代読）やシャヴァン氏による歓迎の挨拶からはじまり、ラニア王女（ビデオメッセージ）やマシエル氏による、基調講演が続きました。松浦氏のメッセージは、本会合の準備会合として開催された四つの地域会合より、市民社会を含むパートナーシップ構築や教員や教育者の果たす役割の重要性のほか、DESD 最終年会合の日本開催を提案する日本政府の意向を伝えました。シャヴァン氏は、また、DESD 後半に向け、ESD の取り組みをさらに目に見えるものにし、ボンを皮切りに世界全体での対話の場を作っていくことが必要であると述べました。

ラニア王女およびマシエル氏は、女性・女兒への差別をなくすための教育と、女兒の基礎および質ある教育の重要性を訴え、子どもたちが教育を通して価値観や技能を身につけることが、「生命を救う手段」にもなりうると述べました。

リッチモンド氏は、ユネスコが ESD の 10 年期間中に発行する予定の DESD グローバルレポートを紹介。グローバルレポートは、以下の予定・内容で発行される予定で、今回の会合では、現在草稿段階にある、グローバルレポート第一号が紹介しました。

グローバルレポート1 2009年発行予定 ESDの取り組み状況や枠組みを紹介(ドラフトは、こちらからご覧いただけます)

ウェブリンク先:

http://www.esd-world-conference-2009.org/fileadmin/download/background/DESDReviewThirdDraft_March_24march09_latest_version.pdf

グローバルレポート2 2011年発行予定 ESDのプロセス、学習の取り組みを紹介

グローバルレポート3 2015年発行予定 DESDの効果と成果を紹介

2日目の午前の全体会は、前日の分科会で主に上げられた事についての報告からはじまりました。イン/ノンフォーマル教育が非常に重要である、ESD実施のための資金が十分でない、ホールスクール・アプローチ(全学校での取り組み)としてのESDの実施には困難な点が多い、多様な教育観のシナジーや省庁連携によるESDの推進の必要性といった点があげられました。続いて、各国のユネスコ地域オフィスから、アジア、アフリカ、中南米、ヨーロッパ、中東におけるESDの10年の取り組みの成果と課題が共有されました。

そして、会合3日目の午後の全体会で、ボン宣言文の最終ドラフトが公開されました。ESD世界会合と同時期に、気候変動枠組条約関連特別作業部会がボン市内で開催されていたこともあり、気候変動というテーマを意識した会合になりました。分科会、全体会を通し、気候変動課題とESDの連動といったテーマが取り上げられ、宣言文にも大きく盛り込まれています。

宣言文の起草には、全体会での議論や、各分科会からの提案が、担当報告者を通して宣言文起草委員(専門家12名と加盟国の代表18名から成る)に報告され、それらの資料をもとに、起草委員会が宣言文を作成していきました。宣言文作成作業は、透明性、参加型、妥当性、結果主義という四つの点が重要視され、一般参加者も議論を傍聴することができたほか、会合途中の全体会で、宣言文ドラフトが公開され、参加者がコメントや意見を述べることができました。会合最後の分科会で、宣言文最終ドラフトが公開され、参加者との議論を経て、採択されました。(ボン宣言文日・英リンク)

4つの目的に沿った22の分科会が開催された

初日午後からは、メイン会場であるボン国際会議場を含め、周辺の公的施設、企業などを会場に、分科会が始まりました。「パートナーシップの構築」、「能力開発」、「教授と学習のプロセス」、「主要な持続可能な開発課題と関連するテーマ」と4つに分類された、合計22の分科会が実施されました。これらの分科会のうち11の分科会は、会合の初日午後と2日目午前の全4時間を使って議論するフェーズIとして、残りの11の分科会は、3日目午前の2時間を使ったフェーズIIとして実施。

ここでは、分科会全体をご紹介することはできませんが、筆者が参加した分科会について簡単に報告をします。

分科会フェーズⅠ：「生物圏保全地域とESD」

世界の105カ国に指定されている、ユネスコ人間と生物圏(MAB)を、持続可能な開発のための学びのサイトとしての潜在性を探り、MABをとおしたESD推進のための戦略を作成しました。分科会の前半では、南アフリカ、ドイツ、フランス、西アフリカ、カナダ、ヴェトナム、オーストラリアにおけるMABにおける、特に環境保全と経済面での両立や、ESDの取り組み、活動を支えるパートナーシップの事例と課題が共有されました。特に地域そのものを学びのための生きた研究室として捉える「ラーニング・ラボラトリー」という視点や、伝統知を科学知に取り入れ新しい知を構築してきた取り組みが紹介されました。

分科会後半は、2つのグループに分かれ、生物圏保全地域を活用してESDを推進するための戦略を作成。ユネスコチェアやASPネットなど既存のユネスコプログラムを生物圏保全地域と連携させてESDをすすめることの重要性や、地域で持続可能な地域づくりにとりくんできたNGOの活用、地域レベル、リージョナルレベルでの知見の共有の仕組みづくり、活動の可視化などといった提案が出されました。

分科会フェーズⅡ：「市民社会の役割とESD」

この分科会には、スイス、フランス、ドイツなどのユネスコ国内委員会の担当者や、ドイツ、スペイン、フランス、台湾、マレーシア等のNGOからの参加者など、全20名ほどが参加。市民社会がこれまでに果たしてきた役割、特異性、高等教育機関に対して市民社会が果たす役割、ESDの10年の後半において、市民社会がどのような役割を果たすべきかというテーマを、4グループに分かれて話し合いました。

グループ討議では、NGOが、プロジェクトの実施に当たり、NGOが、地域の文脈に即した形で適切な手法を用いてきたことや、既存の知を捉えなおし、伝統知やローカル・ナレッジを重要しながら、近代知・学術的な知と統合して新しい知を作り出す役割を担い、新しい知の構築が、それが地域の人びとの力と当事者意識の向上へと貢献してきた、という意見が多く出されました。一方、このような重要な役割を果たしてきたにもかかわらず、このような国際会議に参加できるNGOが少ない、また参加を可能にする資金的支援がないという課題があげられ、2014年の会合には、是非とも市民社会からの参加数を増やし、各国の代表団は、加盟国政府からの参加者2人とNGO参加者4名という構成にするべきだという意見も出されました。

討議を踏まえ、以下が、ボン宣言文に盛り込むべき事項として提案されました。

- ・ NGOの取り組みの優良事例を発掘し、共有する土台を構築（特に、ノンフォーマル、インフォーマル教育の分野で）
- ・ 既存のユネスコのネットワーク（ユネスコスクールやユネスコクラブ）などを活用し、これらのネットワークに適切な支援をする
- ・ 市民社会の活動の促進と支援に関しての、ユネスコ地域オフィスおよびユネスコ国内委員会の役割を強化する

加盟国ブース - 日本政府と民間が共同展示

会合会場の一角には、ユネスコ加盟国の展示ブースが設置されました。国連大学高等研究所、国連開発計画、日本、イタリア、インド、カナダ、オースリア、フィリピンが出展。日本のブースには、環境省、文科省、(財)ユネスコアジア文化センター、国立国会図書館、ESD-Jが共同展示をしました。加盟国ブースは、参加者が多く集まることから全く外れたところであったため、実に来る人の数が非常に少なく残念でした。

ユネスコ ESD 世界会合

日程：2009年3月31日 - 4月2日
於：ドイツボン市 ボン国際会議場

プログラム

3月31日

午前

開会挨拶

松浦 晃一郎氏 ユネスコ事務局長
アネット・シャヴァン氏 ドイツ連邦教育・研究省大臣

プレゼンテーション

ラニナ・アル・アブドゥラ氏 ヨルダン王女(ビデオメッセージ)
ガラシャ・マシエル氏 モザンビーク前教育・文化省大臣

音楽演奏

全体会1 司会：ニコラス・バーネット氏(ユネスコ事務局次長)

会議イントロダクション

ニコラス・バーネット氏

プレゼンテーション

DESD グローバルレポート(ドラフト)で取り上げられている ESD の取り組みに
関する内容や仕組みに関する報告について

マーク・リッチモンド氏 ユネスコ 優先課題調整部長

会議プログラムイントロダクション

午後

分科会フェーズI

特別イベント

4月1日

午前

第二回全体会

DESD モニタリングと評価の過程

ESD の取り組みの背景や仕組みに関するグローバル・レポートの紹介

各地域における取り組みの視点

分科会フェーズI(継続)

ランチタイム

特別イベント

午後

会合中間全体会

会合初日の成果

プロジェクト・ベースの分科会

4月2日

午前

分科会フェーズI

ランチタイム

特別イベント

午後

統括全体会

主要な会合成果と結論

ボン宣言文の採択

フォローアップおよび閉会あいさつ